

はじめに

「かあさん」「おかあさん」「おかあちゃん」――

なんと気持ちのいい呼び名でしょう。「か」「あ」と母音の「ア(a)」がつづくので、晴れやかに響きます。呼んだ方も、呼ばれた方も、気持ちが明るくなります。

それに比べて「おとうさん」は、母音の「オ(o)」「ウ(u)」がつづくので、内にこもった響きになります。だから「おとうさん」には威厳があり、ちょっと畏^{かしこ}まった空気を醸し出すのでしょうか。

明るい響きの「おかあさん」は何度も呼びたくなる名です。サトウハチローさん(二九〇三〜七三二)の「この世の中で一番」という詩が思い出されます。

この世の中で一番

美しい名前 それはおかあさん

この世の中で一番

やさしい心 それはおかあさん

おかあさん おかあさん

悲しく愉たのしく また悲しく

なんども くりかえす

ああ おかあさん

高田敏子さん（一九一四～八九）も「いち日に何度も」という美しい詩を残しておられます。

お母さん

いち日に何度もあなたの名を呼んで

月日は流れる

小さな悲しみも あなたに告げて

小さなよろこびも あなたに告げて

私たちは育った

お母さん こおろぎが鳴いている

もう秋なのね お母さん

お母さん

いづどこにいてもあなたを思つて

時が流れる

いつかやがて おとなになる日が来ても

いつかやがて 離れて住む日が来ても

私たちは甘える

お母さん 背くらべしましょう

美しい秋の空 お母さん

「おかあさん」という呼び名は、明治の半ばを過ぎて、尋常小学校の教科書に採用されてから急速に広まったといえます。それ以前は「おっかさん」が多かったそうです。江戸文学には「かかさま」とよく出てきます。上品な呼び方の「かかさま」が俗語化して、「かかあ」とか「おっかあ」になりました。宮中では「おもう」「おもうさま」とか呼びます。

ちなみに昔は女性が結婚すると「イモ(妹)」と呼ばれました。「愛しい女性」という意味です。ツマは男の呼び名(夫)として使う例が多く、万葉の昔では、夫も妻も相互に「ツマ」と呼び合っていたようです。

「おふくろ」という呼び方にも味があります。親しく懐かしい響きを感じます。子を産んだ母は、昔は子を背負わずに、ふところに入れて育てました。それで「ふとこ

ろ」が「ほところ」になり、「おふくろ」に転化していったようです。すなわち「おふくろ」とは育児を意味する呼び方でした。

また母親にはよく「たらちね」という言葉が伴います。乳児に母乳を与えるときの乳房から連想されたのでしょうか。漢字では「垂乳根」とか「足乳根」と書きます。「ね(根)」は女性に対する尊称。「たら」はタレ(垂)、つまり垂れさがる、ぶらさがること。母乳をたっぷり含む乳房は大きく張り、その重みで垂れさがります。「ち」はもちろん乳です。このリアルなイメージの言葉が母(あるいは親)の枕言葉になりました。

たらちねの母が呼ぶ名を申さめど道行く人を誰れと知りてか(『万葉集』作者未詳)

この和歌は「母が呼ぶわが名をお教えしたいけれども、通りすがりの誰かわからない人にはお教えできません」という意味です。

たらちねの親につかえてまめなるが人の誠のはじめなりけり（明治天皇）

* 「まめ」とは忠実で勤勉なこと

のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり（斉藤茂吉）

* 「玄鳥」とはツバメのこと

この本では「おかあさん」（母、母親）について、いろいろな角度から見つめていきます。結論めいたことを先取りして言えば、「おかあさん」の本質は「自己を超越した無尽蔵な愛」だと思われます。月並みな言い方かもしれませんが、そうした愛こそが昔から至純の母性とされてきました。

ところが今日では、無尽蔵な愛が発揮できない母親が増えたり、至純な母性が歪められたり、母と子のつながりが薄れていく傾向にあります。ゆえに改めて「おかあさん」の本質を認識し直す必要があると思うのです。子を持つ親としての「おかあさん」と、わが命の元である「おかあさん」との両面にわたって。

本書は全部で五つの章から成ります。連続した流れはないので、どの章からお読みいただいてもかまいません。第一章は「男たち」、第二章は「悲しみ」、第三章は「大地と国」、第四章は「つながり」、第五章は「母性」がテーマになっています。

いろいろな人物を採り上げますが、敬称は統一していません。歴史的人物には敬称を略し、筆者との関係（思い）から「先生」「氏」「さん」「さま」など、呼び方はさまざまであることをお断りしておきます。

なお子を産む存在である「おかあさん」のお産については本書で扱いません。拙著『いのち』とつながる喜び』（講談社）を参照下さい。

本書を通して、読者の方々の「おかあさん」に対する認識が深まったり、再発見するお手伝いできたら、この上ない喜びです。

平成二十五年一月

著者

はじめに

第一章 男たちを支えた「おかあさん」

幕末の偉人を育てた母

1. 親思いう心にまさる親心——吉田松陰の母

松陰を支えた家族愛…20 息子への手紙…22

松陰辞世の歌…25

2. 良妻賢母の鏡——藤田東湖の母

集りくる人士…28 リーダーの妻として…30

藤田家の規範…32

和歌に込められた母心…34 身代わりの死…37

母の思いが原動力

1. 無念の叫び声——二宮尊徳の母

極貧の中で…42 亡き母の思いに応える…44

2. 母のために生きる——桜沢如一の母

独自の食養論で世界へ…47 息子を支えた母の内職…49

死にゆく母のメッセーじ…50

3. 母を愛し抜いて——淀川長治の母

仕事への取り組み…54 母と映画の教え…61

ユニークな母親たち

1. ついたたと宝塚——津本陽と森毅の母

楽しむ母からの学び…67

2. 「辛抱」を教えた母——高倉健の母

母を悲しませないために…72

3. ねだる母の真情——ビートたけしの母

食卓の思い出…77 息子からの小遣い…78

4. 記録は最高の贈り物——樋口清之の母

手渡された育児日誌…81 出産の感動…83 教育のチャンス…84

第二章 母と悲しみ

子供たちの母へのまなざし

1. 詩に描かれた「おかあさん」

おかあさんの笑顔…96

2. 消えてしまった母への追慕

「母の歌人」の深い悲しみ

1. 「暗い芽」を心に秘めて

胸に突き刺さった言葉…108

出生前の記憶…110

母になって詠んだ短歌…112

2. 悲嘆に耐え抜きながら

最愛の子を失って…118

「懺悔するような心」で歌をつくる…122

永遠の別れと消失の悲しみ

1. 母への遺言

出撃を明後日にひかえて…127

母に宛てた最後の願い…129

英霊の母の祈り…132

特政の母と呼ばれて… 134 国境を越えた無償の愛… 137

2. 突然消えた娘に捧げる

希望の灯をとしつづけて… 140 母親の本質… 143

第三章 国の母の祈り

母なる大地の神を崇める

1. 大地に異変が起きている

生命体の源である「大地」… 148 母系社会から父系社会へ… 150

2. イザナミとアマテラスの威力

母神の登場… 155 アマテラスの謎… 158 アマテラスの原型… 160

皇室と皇后陛下

1. 皇室の持つ和合の力

歩み来られた両陛下… 164 「和合」のひととき… 166

2. 国母と呼ばれた光明皇后

皇后の慈悲深さ……170

3. 平成の御代の皇后陛下

「国の母」美智子さま……176

美しき愛と犠牲……177

「思いやりの深い人」……180

美智子皇后陛下の祈り

1. 二度の苦しみを乗り越えられて

心ない報道の数々……185
皇后陛下の苦しみ……188

2. 母親としての皇后陛下

「ナルちゃん憲法」……192
すべてを受け入れる……194

沈黙という強さ……195

3. 平和安寧の祈りを捧げて

御歌から感じる慈愛のまなざし……199
個を越えた祈り……201

第四章 母とつながる

慈母と鬼母

1. 慈母に安らぐ子供たち

子供たちの喜び… 208

ママを選んで生まれてきたよ… 211

2. 狂乱する鬼母たち

子を虐待する母たち… 214

繰り返される暴力… 217

純情な心に立ち返る

1. 杜子春の叫び

「お金はもう入らないのです」… 221

試練の果てに… 223

母親の真心に触れたとき… 227

2. 親と子の見えないつながり

親の過去を投影… 231

「純情」を取り戻す実践… 234

3. 父母の慈愛に触れる

父親の愛情… 238

涙の交流で見えてきたもの… 241

両親に思いを馳せる… 245

親への理解を深める… 248

4. 母親とつながる体験

解決できないわだかまり… 251

気憶の貯蔵庫… 254

わだかまりが消えたとき… 255

病気が教えてくれたこと… 257

第五章 母性のよみがえり

1. 母性は本能ではないのか？

母性本能のメカニズム…264

2. 平家らいてふが発見した母性

与謝野晶子との間で「母性保護論争」…269

3. 主婦は仕事をしない女性なのか——フェミニズムの誤り

主婦にしかできない仕事…274 自立しているという錯覚…277

ほんとうの母に徹するとき…279

4. 母性原理の時代へ

「戦士」と「犠牲者」…283 「へだて」の精神から「つなぎ」の精神へ…287

おわりに

主要参考文献

装丁 大久保 學

カバーイラスト 上田みゆき